

## 在宅呼吸器疾患患者に対する呼吸ケア地域連携MAP作成と呼吸ケアプログラム標準化の効果検証



石川 朗 氏<sup>1) 4)</sup>      沖 侑大郎 氏<sup>1) 2) 4)</sup>  
 藤本 由香里 氏<sup>1) 2) 4)</sup>      長田 敏子 氏<sup>3) 4)</sup>

- 1) 神戸大学大学院保健学研究科
- 2) 神戸市立医療センター西市民病院
- 3) たまつ訪問看護ステーション
- 4) 神戸在宅呼吸ケア勉強会

### 要旨

慢性閉塞性肺疾患(COPD)は、実際に診断され治療を受けている患者数は23.3万人で、日本の約530万人が未診断の状態であるとされる。今後も高齢化が進行し、在宅医療への転換が図れる中、在宅呼吸ケアの重要性は更に高まることが予想される。本研究では、在宅COPD患者と在宅医療従事者を対象にアンケート調査を実施することにより、現在の在宅呼吸ケアの問題点を明らかにすることを目的とした。アンケート結果として、①COPD患者は息切れによる行動制限を強く感じ、息切れへの対応方法を望んでいる、②医療従事者側は、息切れへの対応を含めたセルフマネジメント能力向上に向けた指導に難渋していることが明らかになった。

アンケート結果を参考にし、①COPD患者向けのセルフマネジメント教育パンフレット、②在宅医療従事者向けCOPDパンフレット、③在宅呼吸ケア地域連携MAPを作成した。これにより、「COPD患者のセルフマネジメント能力の改善」、「在宅医療従事者の呼吸ケアプログラム標準化」を図り、在宅呼吸ケアサポート体制の普及に向けて、急性期から在宅までのシームレスな呼吸ケアネットワークを構築していくことを目指した。本研究により高齢化の進む都市部における在宅呼吸ケアネットワークの先駆的モデルとして、本邦のみならず国際的にも発信していける足がかりとなった。今回のパンフレットおよび地域連携MAPを配布したことによる効果検証については、今後の課題として、継続して行っていく。

### 1.背景

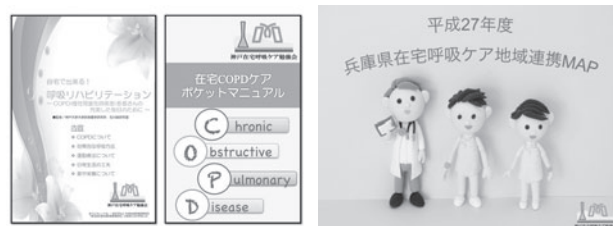
慢性閉塞性肺疾患(COPD; Chronic Obstructive Pulmonary Disease)は、実際に診断され治療を受けている患者数はわずか23.3万人で、日本の約530万人が未診断の状態である報告されている(NICE Study 2001)。健康日本21にCOPDが追加されるなど高齢者医療を考える上で呼吸ケアは必要不可欠である。しかし、我々が以前訪問看護師・訪問リハビリテーションスタッフを対象にしたアンケートでは、在宅呼吸ケアについて「知識・技術がない」「どのように介入したら良いか分からない」「相談できる人がいない」という意見が多く、在宅医療における呼吸ケアに関して難渋しているという現状がある。

### 2.目的

現在COPD患者は増加傾向にあり、包括的呼吸ケアの重要性が、今後さらに高まることが予測される。しかし、我々が過去に調査した在宅医療スタッフに対するアン

ケートでは、知識・技術がなく在宅での呼吸ケアに難渋しているという回答を多数得た。また、日本呼吸器学会がCOPD患者を対象に行ったアンケート調査では、在宅療養・指導に対する要望において、セルフマネジメントに必要なと考えられる様々な情報が不足しているという結果も報告されている。

そこで本研究では、現在の在宅呼吸ケアの問題点を明らかにすることを目的に、(1)訪問看護もしくは訪問リハビリテーションを受けているCOPD患者、(2) COPD



- ①COPD患者向けのセルフマネジメント教育パンフレット
- ②在宅医療従事者向けCOPDパンフレット
- ③兵庫県在宅呼吸ケア地域連携MAP

患者を担当している在宅医療従事者を対象にそれぞれアンケート調査を実施した。また、そのアンケート結果を参考にし、①COPD患者向けのセルフマネジメント教育パンフレット、②在宅医療従事者向けCOPDパンフレット、③兵庫県在宅呼吸ケア地域連携MAPを作成した。

### 3.方法

兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会に登録されている兵庫県内の訪問看護ステーション414施設に医療従事者向けアンケートおよび在宅COPD患者向けアンケートを送付した。

### 4.結果

414施設のうち105施設、医療従事者430名、COPD患者143名からアンケートの返信を得た。

COPD患者121名(84.6%)が在宅酸素もしくは人工呼吸器を使用していた。日常生活で難しいと感じる動作については、入浴(66.4%)、平地歩行(55.2%)、坂道歩行(72.7%)、階段(72.0%)の回答率が高かった。難しいと感じる理由については、疲労(47.1%)と息切れ(59.2%)が多かった。通院以外の外出は47.6%が「なし」と回答し、その理由として息切れへの不安が57.4%で最も高かった。日常生活でもっと教えてほしいことについては、急な息切れの対応について(39.8%)、息切れを軽くする日常生活の工夫について(47.5%)など、息切れに関する項目が多かった。

医療従事者430名の職種は、看護師320名、理学療法士77名、作業療法士27名、言語聴覚士2名、ケアマネジャー4名であった。COPD患者に対し指導していることは、呼吸法(45.1%)、運動療法(31.4%)、服薬・吸入(30.5%)、感染予防(29.5%)が多かった。また、COPD患者に対する指導で困っていることは、セルフマネジメント(29.1%)、評価診断について(26.5%)が多かった。

### 5.COPD患者向けのセルフマネジメント教育パンフレット

事前アンケートの結果を参考にパンフレットの内容を決定した。内容は、COPDという疾患について・禁煙・呼吸法・栄養・運動療法・薬物療法・息切れを軽くする日常生活の工夫、緊急連絡先の記入欄の項目から構成した。表事前アンケートで要望が多かった情報や重要と考えられた情報を多く掲載した。

### 6.在宅医療従事者向けCOPDパンフレット

事前アンケートの結果を参考にパンフレットの内容を決定した。パンフレットの内容は、COPD患者に対する呼吸ケアについて、①禁煙指導、②在宅酸素療法について、③評価および診断、④呼吸法指導、⑤運動療法、⑥患者教育、⑦食事・栄養療法、⑧服薬吸入、⑨パニックコントロール、⑩リスク管理を掲載した。

### 7.兵庫県在宅呼吸ケア地域連携MAP

兵庫県における在宅呼吸ケアサポート体制の普及に向けて、呼吸ケアに特化した情報を掲載した在宅呼吸ケア地域連携MAPを作成した。兵庫県内の病院や地域包括支援センターに配布することで、急性期から在宅までのシームレスな呼吸ケアネットワークを構築していくことを目指した。

### 8.本研究のまとめと今後に向けて

本研究の結果から、COPD患者が日常で困難を感じ改善方法を求めている項目と医療従事者が実際に行っていることの間乖離が認められた。COPDは、息切れによる疲労や恐怖感により活動量が低下しやすい。COPDの生存予後に関する最大の予後予測因子は身体活動量であることから、どれだけ外出機会を増加させるかが重要となる。今後は、機能改善に対するアプローチだけでなく、生活行為の向上に繋がられるような指導方法や体制作りに着目していく必要があると考える。そのため、本研究の目的でもある呼吸ケア地域連携MAP作成により呼吸ケアネットワーク構築を図り、地域医療に携わる医師・看護師・リハビリテーションスタッフを中心に介護者との情報共有および連携を強化していく必要がある。また、在宅呼吸ケアの標準化により身体機能・健康関連QOLを維持もしくは改善させることで急性増悪による入院回数を減少させ、安定した在宅生活継続やリスク管理に寄与できると考える。

本研究により高齢化の進む都市部における在宅呼吸ケアネットワークの先駆的モデルとして、本邦のみならず国際的にも発信していける足がかりとなった。今回のパンフレットおよび地域連携MAPを配布したことによる効果検証については、今後の課題として、継続して行っていく。